

# 中山間地域の地域資源再発見によるまちづくりのためのPBL

藤 居 由 香

(総合文化学科)

Project Based Learning for Community Planning  
by Rediscovering Local Resources in Mountainous Regions

Yuka Fujii

キーワード：地域資源・まちづくり・PBL

Keywords：local resources・community planning・project based learning

## 1. はじめに

島根県では、中山間地域を「産業の振興、就労機会の確保、保健・医療・福祉サービスの確保その他社会生活における条件が不利な地域」と定義している。島根県条例及び規則による中山間地域指定地域以外に該当するのは、松江市の一部、出雲市の一部、安来市の一部、益田市の一部である。つまり、島根県内においては、全ての市町村において、全域または一部に中山間地域が存在している。この社会生活における諸条件が不利な地域において、今後のまちづくりを進めていく上での好転材料を探すために、本報では学生が地域資源を再発見するという視点から検討を行った。

国勢調査の結果から、島根県の平成22年段階の人口が714,397人に対し、大正9年の人口は714,712人という90年前と比べて人口が減少した唯一の県である。このことがテレビ番組で全国的に報じられた。この人口減少社会でまちづくりを進めるには、マンパワーとコストを極力抑えた方策が求められる。成功するかわからない新規開発に人材と財源を投資す

るよりも、現有の地域資源でできるまちづくりに先に取り組む必要があると考えた。本学学生の実情をみると、中山間地域外に立地する国宝出雲大社や国宝松江城のように人の賑わいのある場所のことは知っているが、中山間地域に住んでいながら地元既に存在している価値ある地域資源に気付いていないことがわかってきた。

そこで、地域資源の再発見によるまちづくりの授業カリキュラム構築にあたり、本学においても導入したのがPBLである。大学と地域社会との連携推進やアクティブラーニングの拡大により、学習方法の一つとしてPBLが普及してきたのは周知の通りである。PBLには、課題解決型や課題探求型と呼ばれる“problem based learning”と、プロジェクト学習と呼ばれる“project based learning”があり、両者の混合型も含まれる。

PBL教育の実践がどのような効果をもたらすかについて、私立大学情報教育協会主催の平成25年度教育改革ICT戦略大会PBL分科会の4大学の報告内容からは、共通項として次の4点が見出せた。

- ①PBL は学生のリーダーシップ育成が重要
- ②キャリアデザインのためにPBL が必要
- ③自律学習を促す仕組みとしてPBL を活用
- ④PBLは学生自身が達成感を抱き、学生が育つと  
教員が実感

これらの有効性を意識しながら取り組んだ本学の平成28年度実習科目「歴史的建造物の検証」で展開した“project based learning”について報告する。

尚、平成27年度に初年次ゼミでPBLに取り組んだ成果については、既報<sup>1)</sup>の通りである。

## 2. 歴史的建造物の検証

本学総合文化学科文化資源学系で開講している1年前期選択実習科目「歴史的建造物の検証」では、これまで手描き及びCADによる製図と模型製作を扱い、歴史的建造物や町並みへの理解のために、教科書には「歴史に学ぶ減災の知恵 建築・町並みはこうして生き延びてきた」<sup>2)</sup>を用いている。トレース課題には、前年度まで木造住宅への理解を深めるために、東京江戸たてもの園に移築されている前川國男邸<sup>3)</sup>を題材としていた。

今年度は、建造物の実物を見て確かめられる住宅として、岡山県津山市にある登録文化財旧梶村邸に平面図のトレース課題を変更した。旧梶村邸（城東むかし町家）を選択した理由は、岡山県津山市城東地区の重要伝統的建造物群保存地区内にあり、尚且つ中山間地域であること、地区内には箕作阮甫旧宅、昨州城東屋敷と複数の伝統的住宅が内部公開していることから、学習環境に適していると考えた。比較対象地として、中山間地域ではない重要伝統的建造物群保存地区の鳥取県倉吉市白壁土蔵群と、同地区にある旧牧田家住宅（淀屋）を取り上げた。

さらに、鉄道会社のプロジェクトに参加するため、各自の地元別に担当駅を決めて、ゴールデンウィークの帰省時に現地を調べてきて、駅の施設整備を観察し、良い所と改善すべき内容をまとめる課題及びその発表会を実施した。続いて、水戸岡鋭治氏による鉄道車両内のインテリアデザインの事例学習を行った。

## 3. プロジェクト学習の概要

今回の対象プロジェクトは、JR西日本米子支社主催「第2回山陰みらいドラフト会議」である。第1回同様に4大学が参加し、ゼミや授業などのチーム単位で、山陰両県において取り組み可能な地域活性化につながる提案を発表するものである。民間企業と大学との連携により、単独イベントや単独コンテストとは異なり、本学の場合は筆者の担当授業を踏まえた調査や準備の学習プロセスと、当日発表の両方が含まれているのが特徴である。

今年度の本学からの参加学生は授業履修者1年生11名である。期間は、平成28年4月22日の「歴史的建造物の検証」の授業時間から、平成28年11月13日開催の米子市内ガイナックスシアターでの公開プレゼンテーションまでの7ヶ月間であり、途中に中間ヒアリングという進捗状況と内容確認の日が設定されている。また、授業及びプロジェクトの両方を兼ねた現地調査は、平成28年7月23日に岡山県及び鳥取県の重要伝統的建造物群保存地区（以下、伝建地区と表記）で実施した。尚、この調査の交通費に企業側から支給された費用を充てた。

前述のPBLの効果①PBLでは学生のリーダーシップ育成が重要という点から、リーダーとサブリーダーを学生達の互選により選出した。PBLの効果②キャリアデザインのためにPBLが必要という点については、プロジェクト自体が企業担当者と学生が接する機会があることを活用し、キャリア教育の一環も兼ねて、昨年に比べ、今年は企業担当者の前で学生が発表をする時間を長く複数回設けた。さらに、企業担当者の来学時に業務紹介やキャリア形成についての講話をしていただく時間を設けた。PBLの効果③自律学習を促す仕組みとしてPBLを活用については、教員が解答を示すのではなくファシリテーターに徹し、調べてくる課題を出した後、発表の場を設けることの繰り返しで、学生自身が自発的に提案できる力をつけることを目指した。また、グループの班分けを替えることにより、メンバーが変わっても集団で学習できる自律性の養成を意識した。PBLの効果④PBLは学生自身が達成感を抱き、学生が育つと教員が実感するという点については、学生

自身が目に見える達成感が得られ、教員には学習記録が残るように、昨年のプロジェクト以上に報告書の作成に力を入れ、学習ポートフォリオ化を狙った。

#### 4. 歴史文化資源の再発見と提案

今回のプロジェクトで本学チームは「私たちは縁結び隊～歴史と未来をつなげる～」というテーマを掲げ、地域資源に関する「歴史文化資源」、「生活文化資源」、「環境文化資源」の3つの提案を行った。山陰の魅力や地域特性を話し合い、地域の鉄道少年団の活動を学び、さらには、各自の子供時代の様子を振り返り、地域のつながりが濃いこと、現在の短大生は小学生とは接点が少ないことから、ターゲットは小学生に絞り、地域のつながりを生かして、小学生たちとの交流の場を増やす提案を検討した。

授業内容とプロジェクトの連携を図るために、歴史文化資源の再発見の題材として、伝建地区を取り上げた。寝台特急「瑞風」の予定運行ルートと停車駅が公表されており、授業では、そのルート沿いにある島根県を除く中国地方及び兵庫県の伝建地区の特徴と魅力を各自1カ所担当し調べて発表する課題を出した。また、島根県の中山間地域内にある伝建地区の津和野町、大田市大森銀山、温泉津の3カ所については、グループ分けをして調べ学習と発表を行った。教科書学習からは、学生それぞれが小学生に伝えたいと思う歴史的建造物及び町並みの知恵と工夫についてまとめた。

現地調査では、鳥取県倉吉市と岡山県津山市の伝建地区に加え、「津山まなびの鉄道館（旧津山扇形機関車庫）」という校外学習施設に行き、展示内容だけでなく展示の工夫についても観察し、人に伝えるという視点で見学を行った。蒸気機関車・ディーゼル車・特急車両が集積している場合は、インフラ整備の歴史を学ぶ上でも貴重であり、地域資源として歴史遺産的価値がある。実際の来客者は、鉄道マニア以外に、家族連れで幼児から高齢者までの幅広い層が見学に来ており、室内展示コーナーを見るのに順番待ちが必要なほど混雑していた。

津山市の伝建地区は格子のある住宅中心の町並み景観で一部本瓦葺きがみられ、クランク状の街路が

残っており、倉吉市の伝建地区の蔵と商業施設中心の水路がある町並み景観との違いや、両者とも歴史的建造物を大切にする居住文化の共通項を理解する機会となった。また、授業課題で手描きとCADトレース図面を描いた旧梶村邸の外観及び内部見学を行った際の学生の感想には、縮尺のスケール感が理解できた点や、通り側の江戸時代の外観と奥側の大正時代の外観の比較から様式美の違いが印象に残ったことを記述していた。

「小学生と短大生が一緒に遊べる」提案は、親しみやすく印象に残りやすいゲームとして、誰もが遊んだことのあるトランプで歴史的建造物を知ってほしいと53枚を考案した。ダイヤには運行ルート沿いにある伝建地区の紹介というように一枚ずつコメントが入っている。例えば、スペードのカードの一つには、歴史的建造物の豆知識をわかりやすく伝えるように、「五重塔は地震で倒れたことがない!？」と書き込んである。ハートは一人一人が想う歴史的建造物の魅力と見所を記述した。例えば、「伝建地区は地区全体を見ることも大切。それぞれの地域を巡ることで、当時の様子を感じることができて、まるで昔にタイムスリップした気分になる」、「壁の色を統一したり室外機を隠したりする外観の工夫だけでなく、襖の絵や梁の組み方などの内観にもたくさんの魅力がつまっている」等の学生なりに気付いた町並み景観保存修景計画の記述を大型トランプに貼り付けた。

#### 5. 生活文化資源の再発見と提案

地域資源と類似した言葉に地域産業資源があり、中小企業庁が事業実施を行っている。その定義には、都道府県が指定する「地域の特産物として相当程度認識されている農林水産物又は鉱工業製品」とあり、島根県内及び各市町村内の農林水産物が指定されている。例えば、米の場合は、島根県の島根米、奥出雲町の仁多米のように、県内全域と市町村別に分けてある。

山陰の自慢できる事柄として学生達が捉えていた中に、農業をする人が多い、食べ物が美味しい、豊かな自然というのがあったため、生活文化の中でも

特に食生活文化と消費生活文化に注目した。例年ゼミ生には、家庭では祖父母が野菜や果物等を作っていると話す者が含まれており、日頃の農作業手伝い経験のある学生もいる。「ベジタべるBBQ」と題し、農家の方と一緒に野菜を収穫し、調理をすることで、農作業の大変さやありがたみと山陰の野菜のおいしさを、小学生に知ってほしいと考えた。

バーベキューは、島根産の野菜を7種類（とうもろこし、かぼちゃ、にんじん、ピーマン、たまねぎ、ナス、キャベツ）、焼く順番や、一人分の分量まで、学生達で話し合っただけで決めた。調味料は島根県産では揃わなかった。バーベキュー終わりに混ぜる麺も準備し、調理及び試食会を実施した。野菜が苦手な子供達のために、野菜を子供が喜ぶ形に切り、色々な味を用意し、バーベキューを楽しんでもらおうという企画の提案で、野菜を切る体験を小学生にもらった後の残り野菜は、最後の焼きそばに使うという無駄の無い工夫に至るまで考案していた。

## 6. 環境文化資源の再発見と提案

本学ではこれまで、材料特性を実習から学ぶ「環境資源リノベーション」という科目を開講しており、材料資源の価値を知る上で、どのような加工性を持つのか、鑑別試験を行ってきた。特に風土素材への理解は、地域文化の環境形成を知る上で重要であり、昨年度は環境文化資源として土を焼く瓦を取り上げた。他にも、石材は石灯籠や瑠璃など島根特有の特徴があり、多様な材料資源に目を向ける機会は、島根県内の地域資源の学習には欠かせない。

前述の地域産業資源では、島根県内の林産物として、木材は、スギ、ヒノキ、マツ、鋳工業品の生産に係る技術では、木芸品や木工品が挙げられている。学生達は、今回のプロジェクトで使用する材料資源として、島根の特産で軽いという理由で杉材を選択した。

小学生と一緒にものづくりをするブレインストーミングでは、小学生のための木工クラフトのようなものが提案できないかと話し合った。そのグループディスカッションの中で学生達自身が生み出したのが、島根県の杉材を使った絵馬であった。

どのような絵馬を提案するかをチーム全員で追加検討を行った上で、一人ずつ試作品をスチレンボードで作成した。絵馬は一般的には5角形の一枚板であるが、学生達の考案は、図形のパターンのアイデアだけでなく、部分的に2枚板を重ねる立体化を施したものがあり、住宅の立体感覚養成を目指した授業の成果もみられた。また、学生同士で反響の大きかったアイデアとしては、2枚の絵馬をジグソーパズルのように噛み合わせるタイプのものではあった。実際に学生自身の今の願い事も書き込んだ。

学生達が話し合いながら捻り出したオリジナルのアイデアの絵馬であったが、その後、既に出雲空港2階に絵馬コーナーがあることが判明した。既に類似のものが無いかの検討をしていなかった点は反省しなければならない。絵馬自体は、もともと一般化しているものであるが、その形状や使用方法の部分に、どのような独創性を付加していくかが、真似と言われないためには必要となる。

## 7. 中山間地域の地域資源によるまちづくりのPBL

今回の3種類の地域資源に関する提案では、中山間地域にある歴史的建造物、農産物、木材を題材とし、PBLをポートフォリオ化するにあたり、繋がりからLINKという言葉で学生が連想し、それに沿ってまとめた。頭文字を取ってLはlong（長い歴史：建造物と町並み）、Iはimagine（想像：自他の想像力）、Nはnatural（自然：景観）、Kはkeep（保つ：住宅保全事例）の視点から学習記録を行った。

最終的に、導き出した結論として、「環境文化資源」、「生活文化資源」、「歴史文化資源」の3つの地域資源について、山陰の衣食住ならぬ「木・食・住」に絞った提案で発表会に臨んだ。練習、リハーサルを経て、「縁結び隊」になりきって、本番の他大学との合同発表の場では堂々と発表を行った。

前述のPBLの有効性別に今回の成果をみると、「①PBLでは、学生のリーダーシップ育成が重要」については、リーダーとサブリーダーが責任感を持ち率先して取り組んでおり、短大生としては例年以上のリーダーシップを発揮していた。「②キャリアデザインのために、PBLが必要」についての学生達の

コメントは、「社会人の方に、普段の授業ではなかなか話せないことを話すことができてとても良い機会になった」、「鉄道会社や旅行会社を受験したい」、「自分の将来のことを考えるきっかけになった」等であった。

「③自律学習を促す仕組みとしてPBLを活用」という点については、個々の取り組みの差が少なく、チームワークの良さがあって協調性を基盤とした自律性が育まれた。チーム貢献度に学生間の差がほとんどみられないのは、これまで20年間にわたり短大で担当した授業の受講生の中でも屈指である。学生個人の自律性として、個々の得意な部分でチームに貢献しようという姿勢が見られ、ある学生はCG技能のパワーポイント作図でスキルを発揮していた。

「④PBLは、学生自身が達成感を抱き、学生が育つと教員が実感」について、学生達からはプロジェクト終了後に、頑張れた自分を誇り、自己肯定する感想が多かった。教員の立場から見ると、平成28年4月22日の授業段階での「山陰の自慢できる魅力と元気とは？」という問いかけへの反応は、「松江城周囲の景観」、「災害が少ない」、「緑が多い」、「伝統的な文化がある」というものであったのが、100日後の平成28年7月29日の授業での同じ問いかけには、「地域のつながりが一つのコミュニティになっている」、「地区ごとの行事や運動会がある」、「人と人とのつながりが深い」、「自然や伝統文化を大切に

する」というように、直感的なものから考察的なものへと深化しており、はっきりとした成長の跡が見られた。

今後の課題として、提案までで終わっており、実現性が確かめられていないことが挙げられる。思いつきでは無く、実際にできるものだという証明の場づくりが必要である。そのためには、実証の場を先に確保し、そこから逆算したPBLカリキュラムを構築することが重要であると考えられる。

### 謝辞

教育実践にあたり、J R西日本米子支社の皆様にご尽力賜りましたことに感謝申し上げます。

### 参考・引用文献

- 1) 藤居由香：「初年次PBL教育における伝統的町並み景観を活用したまちづくりーJ R西日本による地域活性化学生プロジェクトを通してー」島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要、(2016)、pp.107-112
- 2) 大窪健之：「歴史に学ぶ減災の知恵 建築・町並みはこうして生き延びてきた」学芸出版社、(2012)、pp.1-198
- 3) 藤木庸介・中村潔・林田大作・村辻水音・山田細香：「名作住宅で学ぶ建築製図」学芸出版社、(2008)、pp.1-94

(受稿 平成29年1月23日, 受理 平成29年2月7日)

